

## 編集後記

就任にあたり、この時代の学術雑誌の意味を少し考えたいと思います。最近、学術雑誌を一号眼を通されたことはあるでしょうか？テレビからYouTubeの時代に移っているように、情報は“見たい物だけ見る”時代です。学術情報も、雑誌の通読ではなく、検索エンジンにより“見たい物だけを見る”ことが出来るようになりました。この検索エンジンが情報を構築する時代の中で、雑誌の時代も終わるのでしょうか？本誌の幹事は、掲載論文をすべて読みチェックします。私も幹事として、何号かの本誌に眼を通しました。本誌を通読しますと、症例に寄り添った内容で、専門分野以外の領域での、自分の知識の盲点に気づかされました。東浩紀氏は“弱いつながり”という本の中で、ネットでの繋がりを強い繋がりとし、リアルでの繋がりを弱い繋がりとして紹介し、リアルでの弱い繋がりの中に、“偶然による知の広がり”があると説いています。昔は、難しい症例は、総説論文から、孫引きを繰り返し類似例の論文を探していました。そうしますと、リアルで探しますので、偶然その号に掲載している論文も眼に入ります。引っ越しの荷造りが片付かないのと一緒に、気づくと、どんどん寄り道し、読みふけっていました。こうして得られる弱

い繋がりには“偶然による知の広がり”を経験する一種の高揚感がありました。一方、検索エンジンは、一瞬で深い知識を提示してくれます。これは、強い繋がりといえます。しかし、その知識は検索語に規定され、絶対に“見たいものしか見えません”。知識は、検索語に誘導され狭く限定される危険があります。学問とは、先人の知に立ち、新たな知の領域を広げることです。これには、領域外への弱い繋がりが重要です。しかし、今や、雑誌でも領域の細分化がすすみ、一号で、広い視野を見渡すのが難しくなっています。本誌は、各領域の専門家に編集委員を依頼しています。症例に寄り添った雑誌です。本誌を通読することで、読者が日々遭遇される患者さんの臨床に役立つ“弱いつながり”を広げ“偶然による知の広がり”を生み出せるよう、読者、投稿者に寄り添った編集を心がけたいと考えています。思考は言語に支配されます。母国語である本誌は、皆さんの思考に短時間で直接的に訴え、これを叶えることが出来ます。これを叶えるべく、編集委員の皆様と共に、本誌の編集に励んでいきたいと思います。

(小野寺 理)

### 〈編集委員〉

編集委員長 小野寺 理

編集幹事 石浦 浩之

編集委員 今井 富裕 木下 真幸子  
下畑 享良 鈴木 匠子 辻野 彰

編集副委員長 三澤 園子

漆谷 真 杉江 和馬

古賀 政利 櫻井 圭太 柴田 譲  
坪井 義夫 中嶋 秀人 新野 正明

「臨床神経学」 第61巻 第6号 2021年6月1日発行

編集者 東京都文京区湯島二丁目31番21号 一丸ビル 一般社団法人日本神経学会  
発行者 東京都文京区湯島二丁目31番21号 一丸ビル 戸田 達史  
印刷所 [郵便番号 602-8048] 京都市上京区下立売通小川東入 中西印刷株式会社

発行所 [郵便番号 113-0034] 東京都文京区湯島二丁目31番21号 一丸ビル  
日本神経学会

郵便振替口座 東京 00120-0-12550

TEL. 03-3815-1080 FAX. 03-3815-1931

ホームページアドレス : <http://www.neurology-jp.org/>